

石 小説 2015年6月15日(月)

「とにかく足が基本だ、走れ！」

我が中学野球部の、大石源太郎監督の言う事は一貫して

「基本は足だ、足腰だ！」

と言う。

新学期に入った2年生も1年生も区別なく、グローブやバットを持つことも許されず、とにかく砂地で出来たグラウンドを、3列で曲がり角では鯉のぼりのようにうねりながら、他のサッカー部や、アメリカンフットボール部の邪魔をしないように走らされる。

1年生の富永が「キャッチボールくらいしたい」と漏らした。

2年生は1年間走り続けて、野球部では走らされ、家で素振りや壁当て、などをしてきた。1年上の先輩達(つまり卒業した3年生)は、大石監督ではなく、違う監督だったため、こうして方針が違うのだ。当時の監督の時、大石監督はたまに来て、我ら1年生達(今の2年生)を走らせていたのだ。その大石監督が中学野球部の正監督に就任した。

とにかく、走らされた、私は長距離走が好きではないが、そんなに苦手でもなく、速かった事もある、1年間、とにかく野球部では走り、家で野球を磨いた。ただ野球部を辞めていくものも少なく2年生だけでもざっと20人はいたのではないだろうか。

50代の大石監督は「よし、また走れ！」と言う。

2年生だってそろそろレギュラーポジションをもらって、守備練習や連携も教わらなきゃならないだろう。でもこう言う。

「走れ！」

短距離走(つまりダッシュ)もさせない。スクワットや四股、うさぎ飛びもさせない。ただただ、長距離を3列で列を作り、前を2年生に1年生がそれに追いついて走った。ただ、大石監督は列が乱れる事、例えば1年生が2年生の速さに追いつけなくなってバラバラに走ったりする事は許さなかった。

大石監督の考えている事はわかった。ただただ、ランニングばかりしているチームがどこまで通用するのか、という狙いだった。大石監督がまず望んだ事は恐らく、コントロールがいい投手。という事も考えに浮かんだ。それが整えば、守りの野球が出来る。そんな事を考えていた。

どんなに考えを巡らしても大石監督の言う事はただ一つ。

「走れ！」

だった。私や2年生の間では、当然グラウンド外で腕立てや草野球に乗じる事もあったが、そんな事は大石監督もお見通しだっただろう。

たまに屋上で相撲やサッカーなどで遊んでいると、さりげなくネットの修理をしている大石監督がいたが、その時も

「元気だな、走っているか！」

などと声をかけていただいた事もあった。

ある日、突然2年生だけで紅白戦をする。

という話が出た。

紅は速球派の投手、白はカーブもよく曲がるコントロール派の投手。

私は白の一塁手だった。

両チーム三振の山を築いた。

しかし、たまに三塁や遊撃、外野に球が飛ぶと簡単にエラーをした。

捕手も取ることに慣れていないから、よくエラーをした。

だんだんと技術的に試合にならなくなっていったところで、大石監督が試合を止めた。

一人の選手が意を決し、大石監督に進言した。

「走るだけでなく、野球の技術も教えてください。」

「走ればいい。走れば・・・」

大石監督は歯切れが悪かった。

私は大石監督が何かこだわっているように見えた。

大石監督は「ひとつの道を磨けば、全て通ずる」

という事を示したかったのだろう。

しかし、野球というもので、大石監督の理想は崩れたかに思われる。

野球をするなら、「走れ！」だけではないのだろう。

キャッチボールもノックも走塁もバッティングも・・・

鍛えていかななくてはならないだろう。

これは実話ではないから、本当に走り続けた人間が野球に通じるかはわからない。

でも、大石監督は言う。

「走れ！」と。

やや意固地になるが、基礎は大切だ。しかし、その次に応用がある。

私は大石監督の言葉「走れ！」から、

基礎だけの人間がどこまで通じるかを知りたかったし、

基礎だけの限界と、

応用に進む時に、自分自身に甘くなっていく事に狼狽（ろうばい）する。『終』

小学生の頃に、暴力を頻繁に使う教師がいた。

これは噂だが、プロ野球の読売巨人軍が負けた日の翌日は、機嫌が悪い事で有名だった。

私も学年の催し物の際、体育館で列に並んで立っていたら、左上空の手すりにいたはずのその暴力教師がいなくなったので降りてくるのだと思った。「私は関係ない事だ。何故ならずっときちんと立っていたから・・・」と思っていたら、どんどん近寄ってきて、頭を叩かれたか、殴られた。

違うときには、女生徒が餌食になった。私と一緒に恐らくフラフラしていたのだろう。校庭で校長の朝礼を聞いていると、後ろから女子生徒の背中めがけて、ジャンピング・ニーキック（背中への飛んで膝蹴り）をしたりしていた。

私のいたこの学校は、小学校1・2年、3・4年、5・6年と2年事に同じ生徒で、同じ担任のクラスになるシステムだった。

私は5年4組の生徒、この暴力教師は5年1組の教師だった。

ただ、私はこの暴力教師の事は大嫌いだし、今はどうでもいい人間だが、

朝6時近くから、生徒を集めて、バスケットボールを多分、厳しくも、教えていた。

違うときには、学校の帰りがけにお菓子を配る変なおじさんがいる、という噂がたったとき、その変なおじさんが運動会を見学に来たときなどは、この暴力教師は激しく熱（いき）り立ち「もう生徒に関わるな」という態度を示す正義感もあった。

自分の生徒の事も下の名前と呼ぶという事や、時間割に関係なく給食や掃除を勝手に早め、運動好きなのかかわからないが、もっと有効な事に時間を使おうとしているのを見た事もある。

しかしPTAへの、暴力教師の暴力行為への批判が高まった。

そして、暴力教師は6年1組への教師にはなれず、1年生のクラスにまわる事になり、代わりに別の年輩の女性教師が務める事になった。

正直、私は嬉しかった。

そして、5年1組から6年1組に上がった生徒達も、暴力教師が外れてくれて嬉しかったはずだ。

しかし、私が勝手に感じた事だが、この6年1組のクラスの生徒の中には、あの暴力教師に去勢されていた時の方が良かったという雰囲気を見せるような生徒もいて、私が普通に教師というものを好きにならない性格だからかもしれないが、「こいつは今、安全な教師になって、暴力教師から離れた事を喜んでるのに嘘を現している。」と感じたりした。

あくまで、この話しは小学生の頃の暴力教師一人に絞って書きたいので膨らませないが、怖い人間（教師）には何かそれでも連帯感を産む、芯か愛か、恐怖感のようなものがある気がする。それに怯えて、従ってしまうのではないだろうか。

私は真っ向から、こういう怖い人間（教師）に嫌悪感を抱く。『終』

「石」(処女作) について

・これは完全な失敗作である。

ただ、最近ちゃんと小説を読み始め、ふと小学生の時にもし小説を書いたら、というイメージを持った事があった。それを思い返して作品にしてみた。

まず、実話ではない。

この大石源太郎監督という人が、走る事だけを追求し、その基礎だけで、野球というスポーツで勝つ事はできるか。という私なりの挑戦の意味で書き始めたものだったが、筆者の私から言わせてもらおうと＜走るだけ＞＜基礎だけ＞では野球は勝てない。という壁にぶつかり終わる。

しかし、文の甘さで、部活では走るだけかもしれないが、家に帰るとか、学校の休み時間にいくらでも応用は（野球の知識は）覚えられるし、練習できるのではないか、というツッコミを入れたくなる。

題名の「石」とは、昔つけた名だが、下半身の強化で足腰が「石」のように鍛え上げられ、固まっていくというイメージだと思う。

最後に＜狼狽＞（ろうばい（うろたえる））は様々な小説を読んでいたら使われていたので、使いたかった事と。「マラソンランナーでも目指せばいいのに・・・」は入れない方が真摯（しんし）に感じたが、在る者は使っておこうという考えで軽い頓知（とんち）として入れた。

「暴力教師」について

・これは「石」よりかは自信作である。

まだまだ、甘い作品ではあるが、私は今の段階では、やはり「私小説」「実話」を書く方が好きである。「石」は架空の話だが、「暴力教師」は真実（ほんとう）の話である。

私はこの「暴力教師」の文のクライマックスを書いている時、なんとなく、日本のプロ野球で、私の中では監督として怖かった事で有名な星野仙一さんをイメージしてしまった。どちらかというと昔の中日ドラゴンズの監督時代の闇雲に怖いだけの（本当はそうではないかもしれないが）時に暴力を振るい、怒鳴り、キレていた頃を思いだした。

多分、今の学校でも相変わらず暴力教師は存在するだろうが、この物語の「暴力教師」が、私に叩いたか、殴った事も理不尽だが、学校とはそういう場所かもしれない。それより、女子生徒が背中にキックを食らって、前のめりに倒れた時のイメージは、男なら、ともかく女性にはないだろうと子供ながらに思った。

＜連帯感から来る、芯か愛か恐怖感＞というフレーズがもっとわかりやすければよい（終）